

120 スズメ目セキレイ科 タヒバリ



L-16Cm

タヒバリと呼ばれているがセキレイの仲間。姿も頭の冠羽が無く、ヒバリの雌に似ている鳴き声も似ている時があります。冬、たまに見かけます。

121 スズメ目ヒヨドリ科 ヒヨドリ



L-28Cm

ヒーヨ、ヒーヨとよく鳴く鳥、昔は里山の鳥でしたが25年位前から都市部に進出し、地下街に巣をかけたこともあります。灰色基調に茶色が混じったスリムな体形をしています。淀川では留鳥ですが渡りをするかも知れられていて関門海峡では春と秋に大群が通過しているそうです。

122 スズメ目モズ科 モズ



L-20Cm

モズで驚かされたことがあります。滋賀県の伊吹山のふもとの農業用水路の立ち木にいたモズがいきなり急降下。次に立ち木に止まったときには、自身の4倍くらいの大きなノネズミをくわえていました。一撃必殺。立派な猛禽です。淀川では早春にモズの求愛の観察ができます。高鳴きの鋭く威嚇した声とは違い、優しい愛のささやきです。大阪府の鳥でもあります。



123 スズメ目レンジャク科 キレンジャク

写真応募中

ヒレンジャクとともに可愛らしい冬鳥の代表。
ヒレンジャクより少し大きく尾羽の先が黄色い。
木の実が好物でヤドリギの分布を広げる一助を担っている。食べたヤドリギの種が残ったネバナの糞が発芽を助けているからです。
飛来する数が年によって大きく違うそうです。

L-20Cm

124 スズメ目レンジャク科 ヒレンジャク



英語名が Japanese Maxwing この鳥も日本と名がつく野鳥です。
2003年3月300羽を超える群が、大阪市内に滞在しました。
小さなメジロよりもやさしい声で盛んにさえずります。
尾羽の先が赤いので他の野鳥と見間違いはありません。
この鳥はシベリア南部で繁殖して、日本や朝鮮半島、中国南部で越冬します。

L-18Cm

125 スズメ目ツグミ科 コマドリ



1998年4月、近所に住む友人が庭で猫がくわえていたと、コマドリを持ち込んできました。骨が折れているわけではなく傷を手当てしてから一週間ほど練り餌を与え放鳥しました。放鳥前にきれいな声でヒンヒンピロロと鳴いてくれました。
ウグイス、オオルリと共に、日本三鳴鳥のひとつです。

L-14Cm

126 スズメ目ツグミ科 ジョウビタキ



L-14Cm

淀川には11月に飛来して桜の咲く頃、姿を消します。一羽づつで越冬。ヒッヒッしばらくしてカタカタッと鳴いて縄張りを主張しています。翼の白い模様が目印です。餌は昆虫やミミズ類。



127 スズメ目ツグミ科 ノビタキ



撮影 久留野 明

伸びた木に止まるからノビタキ。そう思うこともあり、また草原で繁殖するから野のヒタキ。春は頭と背が黒く秋は黄金色になり、淀川に現れます。鳴き声はヒッと区切るように間をおいて繰り返します。

L-13Cm

128 スズメ目ツグミ科 イソヒヨドリ



砂地よりも岩場が好きなイソヒヨドリ。頭と背中が美しいブルー。性格は結構強硬でカナヘビやトカゲの頭をつかみ、巣穴へ運びます。

個人的にはイソツグミもしくはイソルリツグミと呼びたいと思っています。

L-23Cm

129 スズメ目ツグミ科 トラツグミ

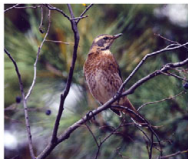


撮影 久留野 明

L-30Cm

横溝正史の獄門島に鶉の鳴く夜は眠られぬと、TVCMが流れました。ヒューイと鳴く声が途切れては繰り返されけっこう不気味な雰囲気がある鳥です。トラツグミが鶉のモデルとされています。

130 スズメ目ツグミ科 アカハラ



撮影 久留野 明

L-24Cm

2006年から冬に観察されるようになったアカハラ。夏鳥とばかり思っていましたが一留鳥だそうです。木の葉を引掻いて餌を探します。昆虫の幼虫やミミズ類を食べています。

131 スズメ目ツグミ科 シロハラ



撮影 小松弘明

L-25Cm

腹の白いツグミで冬鳥で大阪城公園では多く越冬しています。飛び跳ねるように木の葉の上を歩き、木の葉をつかみ投げるように飛ばしてミミズや昆虫の幼虫を探しています。ツイーと鳴くので観察はたやすい種類です。

132 スズメ目ツグミ科 ツグミ



L-24Cm

干潟で水を浴びたツグミ。本来は林や草原の鳥ですが、淀川では干潟で餌を漁することもあります。秋が深まりかけた頃、飛来する冬鳥で淀川では20羽くらいが餌場を巡って、小競り合いしながら越冬します。北帰行は遅いほうで5月半ばに姿を消します。地上を跳ねながら餌を見つけると、立ち止まって昆虫の幼虫やミミズ類を山地では木の実も食べています。止まったときに翼をだらしないようにだらりと下げるのもツグミの特徴。

133 スズメ目ウグイス科 ヤブサメ



L-110cm

何度も山地で出会っているのですが淀川でも出会えて嬉しい気持ちでした。JR新大阪駅の駅舎に迷い込んだこともあります。シシシシシ、、、と5-6秒間鳴き、最初は弱く次第に大きくなります。尾羽がないくらい短く、黄色い眉が目印です。

134 スズメ目ウグイス科 ウグイス



L-16Cm

ホーホケキョーと鳴くウグイス、2006年7月西中島地区の葦原で鳴声が聞こえていました。山地に戻るのを忘れたのか、それともここで相手を見つけたのでしょうか。冬にはチャツ、ジャツ、と区切りながら葦原を、こまめに移動します。ウグイスは冬には山地から平地に降りてきて餌を探しながら春を待ち山地に戻ります。オオルリ、コマドリと三鳴鳥として親しまれています。

135 スズメ目ウグイス科 マキノセンニュウ

写真 応募中

藤波さんとオオジシギの観察中に草むらから草むらへと渡り行く小さな鳥を見ることが出来ました。藤波さんは即座にマキノセンニュウだと教えてくれました。センニュウは潜入の名のごとく、一旦繁みに入れば姿が確認できません。

L-120m

136 スズメ目ウグイス科 コヨシキリ

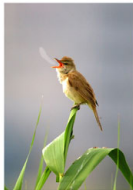


夏鳥で繁殖地は局地的だそうです。淀川では旅鳥、春に観察されています。コヨシキリの鳴き声はチリチリチリチュチュ、ジュジュ、チチチ、ピピピ、チュウチュウと複雑で長いさえずりです。以前には声が聞こえていましたが、近年は聞かれなくなり残念です。

撮影 藤波不二雄

L-140m

137 スズメ目ウグイス科 オオヨシキリ



淀川の葦原で春、あちこちからギョギョシギョギョシゲグッと声が聞こえれば、それはオオヨシキリの求愛の叫び。雌を呼び込むために声を振り絞って鳴きます。口の中の赤さと縄張りの広さが決め手なのです。ウグイスの仲間とも思えぬ声です。

梅雨が明けると、しばらくして鳴き声がほとんど止みます。

L-180m

138 スズメ目ウグイス科 センダイムシクイ

写真募集集中

淀川では秋の渡り時期に、立ち木を巡る姿を見かけます。チイチョイと鳴き、焼酎いっぱいグイーとか、ツルチヨギミーと聞きなされ、この名がついたようです。インドからスマトラ周辺が越冬地。ウグイスよりも緑色がきれいです。

L-13Cm

139 スズメ目ウグイス科 セッカ

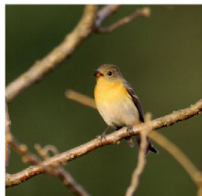


淀川では留鳥。真冬には5羽くらいの群で地面を這うように餌を探しています。

春になると雄はヒッヒッヒッヒッと繰り返して鳴きながら上昇し、チャチャツ、チャチャツと鳴きながら下降します。色もやや鮮やかになり雌を誘います。体重が軽いので、草のつるや穂先に止まることが出来ます。

L-13Cm

140 スズメ目ヒタキ科 ムギマキ



若鳥と思われるムギマキです。2005年10月末頃、西淀川区で観察されました。シベリア南東部で繁殖。日本を經由して東南アジアボルネオ島あたりで越冬します。5月と10月が観察のチャンスです。関東、東北地方で麦を撤く頃飛来することからついた名だそうです。

L-13Cm

141 スズメ目ツリスガラ科 ツリスガラ



ツイーと優しい声で鳴き合い、30羽くらいの群で、冬寒くなって淀川を訪れます。

顔はサングラスをかけたよな過眼線があり、チョイ悪に見えますが、おとなしい小鳥です。

葦の皮をそいでカイガラムシを食べるので近く来るとバキバキと音がします。葦原を大きく移動するときはかなり高いところを飛びます。

L-11Cm

142 スズメ目シジュウカラ科 シジュウカラ

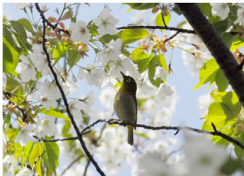


サルスベリの木に来て羽繕いをしているのはシジュウカラ。巣穴から出てきて入念に、身支度しています。

ツツビーツツビー、ジュクジュクと鳴いて、お互いの位置を確認し合いながら枝を移動します。秋から早春にかけてはメジロやコグラエナガなどと一緒に木立を移動しています。首からお腹にかけて黒いネクタイのような、模様が目印です。

L-15Cm

143 スズメ目メジロ科 メジロ



眼に白いリングがあり、名がついたのでしょう。冬には街路樹や庭木に来てツイーチョイーと、可愛い声で鳴き合います。

桜が散ると山地に移動するの、淀川ではほとんど見かけなくなります。

昔から梅にウグイスと思われていましたが、メジロだったのではないのでしょうか。

L-12Cm

144 スズメ目ホオジロ科 ホオジロ



撮影 藤波不二雄

L-17Cm

一筆啓上仕る（イッピツケイジョウツカマツル）と春と秋に葉先や枝先でさえずっている留鳥。目立つのは鳴き声と黒白に塗り分けた顔立ち。地鳴きはチチッ、チチチッ、アオジはチッと一鳴きなので覚えておくと観察の際に役立ちます。以前は河川敷に多くいましたが、ここ10年間減少している気がします。

145 スズメ目ホオジロ科 ホオアカ



L-16Cm

チッチョチュイとゆっくりさえずる眼の下に赤茶色のくまがある淀川では冬に観察されたホオジロの仲間。鳴き声もよく似ているが、少し小さめ。ホオジロに混じり飛来していたようです。

146 スズメ目ホオジロ科 ミヤマホオジロ



撮影 久留野 明

L-16Cm

ホオジロの仲間では断然の一番人気なのが、ミヤマホオジロ。チヨイ悪親父ならぬ、チヨイ悪小僧の出で立ち。眉と喉が黄色くて、目立ちます。秋から桜の季節までが観察時期です。チッチッチュルリとホオジロよりも細かい声で鳴きます。

147 スズメ目ホオジロ科 カシラダカ



L-15Cm

シルエットはミヤマホオジロに似ていますが、羽色に黄色みがないのでよく見れば違いが分かってきます。冬鳥で淀川では寒い時期にしか観察されていません。鳴き声はチツとか細い声。頭の冠毛を立てた姿はなかなかのものです。

148 スズメ目ホオジロ科 アオジ



L-16Cm

草むらでチツと強い声で区切って鳴く、10羽くらいの群でいます。留鳥とされていますが淀川では11月から6月にかけて観察されています。黄緑色がこの鳥の特色です。

149 スズメ目ホオジロ科 オオジュリン



L-16Cm

チッチイチョと鳴き交わし、群で葦原を移動する淀川では冬の鳥。ツリスガラのように葦の皮をはいでカイガラムシなどを食べています。時には写真のように葦やスキの穂をしごいて種を食べたりもします。春が近づくと頭が黒くなり別の鳥に見えます。

150 スズメ目ホオジロ科 シベリアジュリン



L-14Cm

数少ない冬鳥。

オオジュリンによく似ていて、オオジュリンにまぎれて冬枯れの葦原でたまに見かけていました。撮影まで15年かかりました。オオジュリンよりも少し小さく、腹が白っぽくて脇から腹に縦のまだらがありません。



151 スズメ目アトリ科 マヒワ



撮影 藤波不二雄

L-12Cm

小さくてチュイン、チュピーと鳴き、淀川では主に秋、マツヨイグサの種を食べに来ます。本来は山の鳥で冬鳥です。

152 スズメ目アトリ科 カワラヒワ



L-15Cm

キリッコロロと鳴いてジェーッと区切る鳴き声と、飛んだ時に黄色が目立つ留鳥。ヒマワリの種が好物らしく、よく啄ばんでいます。10羽前後の群で河川敷の植物の種に集まっています。写真は府立高校の自由学習の折に撮影した作品です。

153 スズメ目アトリ科 ベニマシコ



2000年の冬、観察されています。
スズメくらいの大ききで、フィットと鳴き口笛の
ようです。肩からお腹にかけての紅色が腹を引
きます。

L-15Cm

154 スズメ目アトリ科 イカル

写真 応募中

何度も撮影しているのに今回掲載できません
でした。
公園の立ち木にもやって来て、キーキョキョ
キーと鳴いています。ツキヒーホシと聞きな
して冬のサンコウチョウとも呼ばれることが
あります。
大きく太い黄色いくちばし。硬い実も割って
しまいそうです。

L-23Cm

155 スズメ目ハタオリドリ科 スズメ



お馴染みのスズメですが、秋から冬にかけては
群となり、何百羽にもなったりします。
チュンチュンとか、チュリチュチュンとよく
鳴いています。秋にはねぐらの立ち木や、竹
やぶに何百羽と集まります。立ち木はいつも
使うわけではなく、数日で別の木に移動して
いるようです。
人の生活に順応しているらしく、ダムなどで人
が住まなくなった山村からは退去し、移動する
そうです。

L-14Cm

156 スズメ目ムクドリ科 ムクドリ



L-24Cm

河川敷の芝生にて、日向ぼっこ中のムクドリの群。秋から冬にかけて大群になってねぐらへと帰ります。伊丹市の昆陽池の日本列島の形の島もねぐらの1つで、日の出前に何千というムクドリが朝焼け空を飛立って行きました。九官鳥もムクドリ科なのでムクドリも稀にしゃべることもあるそうです。

157 スズメ目ムクドリ科 コムクドリ



撮影 藤波不二雄

L-19Cm

2006年5月に観察されています。淀川では旅鳥。ムクドリよりも白っぽくて鳴き声も優しく聞こえます。ムクドリの群に紛れることもあるので春と秋のムクドリの群に注意しています。ボルネオやフィリピンが越冬地。

158 スズメ目ムクドリ科 ハッカチョウ



L-24Cm

2006年11月に西中島地区の河川敷でイチジクの木に、ついでているのが観察され、2008年7月には繁殖行動まで観察されています。もしかしたら今日にも雛を連れてハッカチョウの家族が、観察されるかもしれません。

本来は、台湾の野鳥です。ムクドリよりも黒く、くちばしの付け根から伸びるシャドーロールのような飾り羽が特徴。雄雌共にあるのが面白いと思います。